
魅月町・表裏の月

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅月町・表裏の月

【Nコード】

N4065D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

ふかもりとモカ 深森智華と志波正法は幼馴染。共に音楽を愛し、バンド仲間たちと平穏な日々を過ごしていたが……”町”自身が語る現代ドラマシリーズ・その4

プロローグ・魅月町の朝

波が寄せては引き、引いては寄せる。野良犬の姿さえ見かけない静かな海岸線の果てに、今日もまた朝の日がのぼる。淡い橙色の光がうつすらと浜を染めながら陸にあがり、町に生きる人々に目覚めを促していく……。

ん？ おお、失礼。早朝の海にすっかり見とれて風流な気持ちになっていた。

ご存知の方もおられるだろうが、一応名乗っておこう。魅月町だ。

名前の通り、私は「人」ではなく「町」である。そしてこの町には多くの人間が住み、多くのドラマが存在する。

これまで私は3つのドラマをみなさんに紹介してきた。ちょっとおさらいしてみよう。

第1話・【針葉の花】

第2話・【夢想の鳥】

第3話・【騎行の風】

これらはいずれも、男性を主人公にした物語である。そこで、今回は女性を主人公にした物語を紹介したいと思う。

……おっと、言い忘れるところだった。前回の話を知らなくても、今回の話を聞くのになんら支障はない。ちなみに、冒頭の私の独白

もストーリーには全く関係ない。あしからず。

今回のタイトルは……【表裏ひょうりの月つき】

さあ、ご覧あれ！

第1章・仲間（前書き）

深森 智華（ふかもり ともか）

15歳・中学3年

幼少時から音楽を聴くのは好きだが、絶望的なほど音痴。3つ年下の弟がいる。

第1章・仲間

朝、遅刻しそうになってパンをくわえたまま登校する。なんて古典的な朝の様相を晒すことは一切なく、ふかもりともか深森 智華は余裕で学校に間に合うタイミングで家を出た。

しかし、それにも関わらず、智華が学校につくのはいつも遅刻ギリギリの時間だった。その理由は、智華の向かった先にある。

「今日こそは一発で出てきて欲しいわね」

そう言っしほ まゆのりて訪れたのは、幼馴染・志波 正法のアパートである。インターホンを押し、ドア越しに呼び掛ける。

「まさー、おはよー」

返事がない。続けて何度もインターホンを押す。

「早く出てこーい。起きてるー？」

やや間をおいて、あいまいな声が返ってくる。

「うーん……寝てる……」

「って起きてるじゃん！ フザケてないで早くしなさい」

ガチャガチャと鍵をいじる音がして、ドアが開く。

「ふぁ……おはよ」

Tシャツ、ボサボサの髪、とろんとした表情。全身から「寝起きのオーラを醸し出すこの少年が正法である。

「おはよ。じゃない！ 早く支度しろ！ど うせ昨日も遅くまでギターやってたんでしょ」

「へいへい……」「ご名答」

奥の部屋に引っ込んでいった正法が出てくるまで、智華は廊下の壁にもたれて待っていた。

「ったく……バンドでギターやってるときは結構マトモな顔つきなのに……」

智華と正法は保育園のころから兄妹のように仲が良かった。二人とも活発な性格で、昼寝の時間を抜け出して外で遊んだりしていたものだ。趣味が音楽であるという共通点もあった。

二人が中学生になった時、正法はアパートで一人暮らしをはじめた。理由は……深く説明はしないでおこう。ただ、本人はむしろ自由な空間ができたことに喜んでいる。

そして、毎朝正法を起こしに来るのが智華の役割になった。

「お待たせ」

学生服に身を包んだ正法が出てくる。

「今日は……うん、いつもよりかはマシな時間ね」

「さすがにメシ食う暇はないけどな」

古典的な朝の様相を晒す正法を連れて、智華はアパートを出た。

「おはよう、お二人さん」

「おはよ、エンタ」

「おはよう」

学校の近くで声を掛けてきたのは、正法のバンド仲間内海うつみ まどか 円で
ある。漢字の通り丸々とした体格で、あだ名はエンタ。

「まさ、お前よく毎日パンだけで昼までもつなあ」

「好きでパンだけにしてるわけじゃねーよ」

「好きなだけ寝てるからパンだけになるんでしょ」

智華のツツコミに、正法は少しだけ顔をゆがめる。

「う……。そこを突かれると痛い……」

「あははは。一本とられたな、まさ」

円が笑うと、ただでさえ丸い顔がますます丸く見える。まるで大

福もちのようだ。（褒め言葉のつもりだ）

定刻の十分前に三人は校門をくぐる。

「そんじゃ、放課後ね」

「おう」

一人だけクラスが違う智華は自分の教室に入る。教室にはすでにほとんどの生徒が来ており、あちこちから会話の声が聞こえてくる。

そんな中、窓際にポツンと離れて座っている女子がいた。目つき、輪郭、雰囲気、すべてが「鋭い」と表現されるその女子に、智華は近づいて声をかける。

「レイ姐、おはよう」

「おはよう。今日は少し早いんじゃない？ ……とうとう彼を見捨てて来たか」

「違いますー。ちゃんと連れてきました」

とても中学生には見えない。高校生、いや、女子大生といつても通りそうなこの女子が木崎^{きさき} 怜子^{れいこ}である。

言うまでもなく智華と同じ年なのだが、智華は尊敬と親しみの念を持って「レイ姐」と呼んでいる。

「いいかげん、その敬語やめてよ。ねえさんって呼ばれるのは悪い気しないけど」

「だって、レイ姐スゴイ大人のムード出てるんだもん」

「……老けてるって言いたいのか？」

顔を窓の外に向けたまま、視線だけを智華に向ける。

「ち、違いますっ！ その、なんというか、色気というか……」

「フフ。前向きに受け取っておくわ」

怜子も以前は正法のバンド仲間だったが、数か月前に突然やめている。その理由は誰にも話さないが、今でもメンバーとの交遊関係は続けている。

「レイ姐が抜けてから、まさの奴自分がヴォーカルも兼任するって言いだして大変なんですよ。あいつギターは上手いけど歌はからっきしで……」

「知ってる。……ねえ、智華。あんたがヴォーカルやれば？」

「わ、私はムリですよー。音楽は好きですけど、小学生の音楽の授業で自分の音痴っぷりを思い知らされましたから。」

手をブンブン振って否定する。正法に対しては強気な智華も、怜子の前では小さな子供のようだ。

チャイムが鳴って担任の教師が教室に入る。周りの生徒が会話を中断して自分の席に移動し始めた。

「それじゃレイ姐、またね」

そう言っ て智華も席に戻って行っ た。

「可愛いね……アンタは……」

小さくつぶやかれた声は、ガタガタと鳴るイスの音にかき消され
た。

第1章・仲間（後書き）

今回はいつもより少しキャラクターが多くなりそうです。

第2章・仲間、+1（前書き）

志波 正法 （しば まさのり）通称まさ

15歳・中学3年

中学に入ってから仲間を集めてバンドを結成した。ギター担当で、一応チームリーダー。

第2章・仲間、+1

放課後、バンドの練習場として使っている視聴覚室にメンバーが集まる。

いや、正確に言うと「メンバー - 1、+2」が集まっている。

「-1」というのは、メンバーが一人まだ来ていないことを表し、「+2」は正式なメンバーでない智華とすでに引退した怜子のことである。……最初からこういった方が早かったな。

「遅いな、コジロー」

そう言っただけが時計を見る。

「今日は久々にレイが来てるってのによ」

「……別に、その気になればいつでも来れるんだけどね。あんたの歌唱力がどれくらい向上したのか、聴きに来たのさ」

「アハハ。すっこーしは聴けるようになったかな、うん」

円が一発ドラムを叩いて笑う。ちなみに、円はほぼ体型だけでドラムに決定された。

「……うるせえな。智華がやるよりはマシだろーがよ」

「なによそれ。偉そうな口を利く前に、一人で早起きできるようになりやがれっての」

ムッとして反論する。

「いつまでその話引きずるんだよ……にしても本当におせーな、コジローのやつ」

もう一度、正法は時計を見る。いつもの練習開始時刻を二十分ほど過ぎていた。

「おれ、ちょっと探してくるわ」

「おう、頼むぜエント」

「んじゃ、いつてき……うわっ！ き、来てたのかよコジロー」

円が立ち上がって開けたドアのすぐ外に、最後のメンバーがすでに来ていた。

「わ、悪い。遅くなって」

上床 次郎じろうは、一見して「不良」の印象を受ける。しかし、実際に話してみるとなかなか気さくな男である。

「コジロー、なにやってたの？」

「あ、レイ。来てたのか」

「来たよ。で、なんで遅くなったのかって聞いてんの」

決して声は荒げないが、重い響きがこもっている。

「あ、いや……その、ちょっと、さあ」

次郎は怜子の空気に圧倒されてしどろもどろになっている。

「とりあえず、中入ってドア閉めたら？」

智華がその声をかけようとした時

「うわゝ本当に丸い顔……」

別の声が被さってきた。廊下からだ。

「あ、あのアナタがエン……じゃなくて円さんですか？」

「そ、そうだけど」

智華の位置からは、次郎と円の影になって声の主が見えない。

「誰？」

そう言つて場所を移動しようとした時、智華は気付いた。

位置的にその声の主の姿が見えているであろう正法が、ボーッと見惚れるような顔になっていることに。

「……まさ？」

返事がない。そして、次郎が横にどき、声の主が部屋に入ってきた。

「初めまして。若原^{わかばら} 雪乃^{ゆきの}、一年です。このバンドのヴォーカルを希望しています」

くりつとした大きな目、職人の編んだ絹のように滑らかな肌、軽くウェーブのかかった柔らかな髪。総じての印象は「美人」というのもいい。

「雪乃はおれのイトコで、子どもの頃から結構歌が上手いんだ。レイが抜けてヴォーカルがないから、どうかなって思ったんだけど……」

「おれはいいぜ」

即答したのは円だ。

「少なくとも、今のまさより悪くならなきゃいいからな」

「うるせえよ。お前も歌うのはダメだろうが、エンタ」

正法が寄ってきて円の頭を軽く小突く。その手を、雪乃が握った。

（な、なにやってんの！？ この子！）

雪乃がいきなり正法の手を握ったのを見て、智華は心の中で叫んだ。

「まさ……のり、さんですよ。ギターがとても上手だって聞きます」

「あ、ああ……そう?」

正法は顔を真っ赤にしている。智華と怜子以外の女子には慣れていないらしい。

（ちょっと、いつまで手え握ってんのよ。まさも、熟したトマトみたいになるな!）

智華の心の声を通じたのか、（そんなことがあるわけないが）ようやく雪乃は正法から離れた。

そして、次は怜子に近づく。

「怜子先輩、お会いできて光栄です」

しかし、さすがに怜子は正法ほど単純ではない。

「ありがとう。……ねえ、コジロー」

いまだにドアの近くに突っ立っている次郎に声をかける。

「なに?」

「あんたの推薦なら信用するけど、一応この子試してみてもいいんじゃない?」

入部試験をしよう、ということだ。

「そうそう、こっちの音楽に合わせられるか試してみないと」

智華も便乗してテストを促す。智華は、雪乃のなにか……漠然として明らかではないが、「なにか」が気に入らなかった。

「まあ、おれもそれは考えてたんだ。まさ、エンタ、一曲いいか？」

「おれたちも演奏すんのか？」

正気に返った正法が聞き返す。

「演奏した方がいいんじゃない？その方が歌いやすいでしょ。……声は私と智華が聴いておくよ」

「とも、か……さん」

ここでようやく、雪乃が智華の顔を見る。智華のことは次郎から聞いていないらしい。

「あ、あたしは正式なメンバーじゃないから……」

なにか言われる前に、智華は自分から声をかけた。

「……」

雪乃は何も言わない。代わりに、正法が口を挿んだ。

「智華は音楽好きだけど、なにやらせても全然ダメなんだよな。下手の横好き」

「よ、余計なことまで言うな！ バカまさ！ 明日から起こしてやらないぞ」

「んだと！……それは、困る」

「アッハハハ！バカまさ、だつてよ」

円が豪快に笑う。次郎と怜子も、いつもの二人のやりとりを微笑ましく見ている。

ただ一人、雪乃だけが、おもしろくなさそうな目つきで智華の顔を見ていた。

第3章・格闘（前書き）

内海 円（うつみ まどか）通称エンタ

15歳・中学3年

両親からの遺産をストレートに受け継いだ丸顔。ドラム担当で、演奏の時は機敏に動く。

第3章・格闘

「ただいまー……」

「おかえり」

智華が帰宅すると、母が出迎えた。

「おフロ湧いてるわよ。遅くなる前にさっさと入りな」

「はい……」

生気のない声で答える。視線も母を見ていない。ヨロヨロと危なっかしい足取りで家の奥へと進んでいく。

「……ちょっと、智華。大丈夫？ 熱でもあるの？」

心配そうに母が尋ねるが、智華は口で答えずに頭を横に振ってそのまま自分の部屋へと消えた。

「ふーむ……昔から体は頑丈な子だからそっちじゃないな。原因は……男、ハハーン、正法君となにかあったな？」

オバサン探偵、ここにあり。その推理は当たらずとも遠からじ、といったところか。

「なに、なに、なに？ なんなのよ、あの雪乃ってコ！」

部屋の明かりをつけた智華は、カバンをベッドに叩きつける。

「そりゃあ、あたしは楽器も歌もできないし、メンバーじゃないけどさ……明らかにあの子あたしのことバカにしてる！」

そう言つて今度はベッドに自分の体を投げかける。ベッドがギシツと悲鳴をあげる。

「あゝ、もう、イライラするゝ」

バタバタと（ジタバタと）手足を振るう。その度にギシッギシッと唸り声が響く。

うつむ、少々、ベッドが可哀そうだ。残念ながら私にはベッドを助けてやることはできないが、その代わりに少し時間を巻き戻して、智華の怒りの根源を探ってみよう。

「ど、どうでしたか……？」

以前から練習していたという、正法たちのデビューソング【ハイウェイ・ジャック】（作詞・正法）を歌い終えた雪乃は怜子の顔を見る。

「そうね……」

「いやー、よかった！ 久々に燃える演奏だったぜ」

円が額に浮かぶ汗を拭きながら割って入った。

「やっぱ上手いヴォーカルがいるとこっちも腕が鳴るなあ。そう思うだろ？コジロー、まさ」

「そりゃ、おれが推薦したんだから当然だ」

次郎が仁王立ちのポーズをとって答える。

「まさには？」

「ん、ああ。そうだな……」

みんなが正法に注目し、次の言葉を待つ。

「うん。上手かった。メチャクチャ良かった」

「本当ですか!？」

雪乃が目キラキラと輝かせて喜びの声をあげる。

「んで、最高審査委員長の意見は……」

今度は、怜子に視線が向く。

怜子は目を瞑り、フーッと息をつく。

「上等。早めに引退しておいてよかったって思っくらいにね」

「そ、そんな……」

「いや、本当に。同時期にメンバーにいたら私の方が追い出されて
いただろうね」

「おお、スゲエ。レイにそこまで言わせるか！」

円が大きな手で拍手を送る。

続いて、正法と次郎も手を叩こうとする。が……

「ちょっと待ちな。合格発表はまだだよ」

怜子が止めた。

「あと一人、審査員がいるでしょう？」

「あ、そうか。智華はどうだった？」

今度は智華が注目される番……かと思っただが、視線を向けている
のは怜子だけだった。わざわざ聞くまでもない、と言うムードが出
来ている。

（……正直に言って、上手い。うますぎる。反則的なほど完璧……）

智華はそう思った。しかし、それをそのまま言うのは、なぜかは
ばかられた。

認めたくない。そんな気持ちだが、心のどこかにあった。

（かわいらしい顔して、あんなド迫力な歌詞に合う声出せるなんて
……反則通り越して犯罪）

「とも……？　どうしたの？」

怜子に声をかけられ、智華は自分がいつの間にか難しい顔でうつむいていることに気付いた。

「そ、そうね……えっと……（少しシャクだけど、とりあえず空気を読んで何かいっとかないと……）」

一旦仕舞い込んだ言葉を、渋々のどの奥から絞り出す。

「ま、まあ……上手かった……でも」

「だろ！？　よし、ユキノちゃん、正式採用けつてーい！」

でも、の後の言葉は、円の声とそれに続く大きな拍手に遮られた。しかし、この事はかえって良かったのかもしれない。

智華は、「でも」の後に何を言おうか、全く考えていなかったのだから。

そのあと、もうしばらく練習を続け、帰り支度をする時間になった。男子が汗にまみれた服を着替えるために視聴覚室に残り、女子三人は廊下に出る。

「それじゃ、私は先に帰るよ。バイトがあるからね」

「あ、ハイ。さようなら、怜子先輩」

「また明日ね。レイ姐」

智華が手を振ると、雪乃の目が鋭くギラついた。

「あ、あの、怜子先輩っ！」

「ン、なに？」

「私も、怜子先輩のことレイ姐って呼んでいいですか!？」

「……好きにしな」

そのまま怜子は廊下の向こうに消えて行った。

智華は疑問に思った。なぜ、雪乃はいきなりあんな申し出をしたのだろう……と。

その思考は、すぐに中断される。

「……智華先輩」

「な、なに？」

「先輩は、なにか楽器出来るんですか？」

「うっん。全然……」

雪乃の意図が読めない。

「楽器はできないけど、ここには来てるんですね？」

「う、うん……」

「……」

「……」

そのまま雪乃は黙り込み、気まずい空気が流れる。

智華には、正法達が出てくるまでの数分間が果てのないように長く感じられた。

「なにもしないヤツが来るなってことでしょ！？ ちょっとばかり歌が上手いからってそこまで言わなくてもいいじゃないのよー！」

ベッドを相手にしたプロレスごっこはまだ続いている。

「まさのヤツも、手を握られたくらいでなにニヤニヤしてんの、よ……っ？」

”まさ”その言葉を口にした途端、智華の勢いが止まった。

「って、まさのことは別にどーでもいいの。うん。アイツのことは

自分に言い聞かせるように何度も頷く。

「ともー、早くお風呂入りなさいー！」

「ハイ、今行く」

智華が部屋を出て行って、ようやくベッドに平穩が訪れたのであった。

第4章・薄雲（前書き）

上床 次郎（うわとこ じろう）通称コジロー

14歳・中学3年

なにかと色々なコネを持っている。ベース担当で、腕前はそこそこ。

第4章・薄雲

チチチ……と、鳥の鳴く声がする。よく晴れた、気持ちのいい朝だ。智華はいつも通りの時間に家を出た。

「ユキノちゃんのことは一先ず置いて、今日もバカまさを遅刻させないようにしなくっちゃ」

が、置いておくことはできなかった。正法のアパートの前に来た時、ある人物を発見した智華の心に薄雲が広がった。

「ユキ、ノちゃん……？」

「……おはようございます。智華先輩」

朝日の光を受けて爽やかにキラめく、ウェーブのかかった髪。雪乃だ。

（なんでここにいるの？）

雪乃の目的を知りたい。そう思った智華は探りを入れてみた。

「ここ、まさのアパートだって知ってた？」

その問いを待ち受けていたかのように、間髪いれず答えが返ってきた。

「ええ。寝坊が多くて遅刻しやすいと聞いたので、迎えに来たんです」

「そ、それは……」

それは、あたしの役割なんだけど。そう言おうとしたが、思いとどまった。

雪乃はそのまま何も言わず、アパートの階段を上がって行く。カン、カンという金属を踏む足音が響く。智華は急いで追いかけた。

「203号室、203号室……」

正法の部屋番号まで知っている。すぐに目的のドアの前に辿り着き、ドアをノックする。

「ノックぐらいじゃダメよ」

追いついた智華が雪乃を押しつけるようにドアの前に立つ。

「こいつは大声出して呼んでやらないと、いつまでたっても起きないから」

胸を反らせ、大きく息を吸う。

（さすがに、これは譲れないからね）

一瞬、息を止め、今度は勢いよく吐き出しながら声を飛ばす。

「起きろ！ まさ……」

「おはよう！ ユキノちゃん！」

ドアが急に開き、すっかり支度を終えた正法が飛び出してきた。

「あ、あれ……？ 智華？」

「な、なによ、まさ。なんで今日はこんなに早いわけ？」

互いに驚いていると、横から雪乃が割って入る。

「おはようございます。正法先輩」

「おお！ ユキノちゃん、おはよう」

雪乃を見つけた正法の目が活き活きと輝く。

（なにが、おお！ なのよ……態度違いすぎ）

説明によると、雪乃の登校ルート上にたまたま正法のアパートがあり、そのことを知った正法が自分の部屋番号を教えたらしい。

実際、智華にとってはおもしろくないことだ。自分が何度言っても朝に弱い正法が、雪乃が来ることになった途端に早起きになるのだから。

「いや、今日はいい天気だなあ」

十分余裕を持って三人は学校に向かう。その間も、正法は雪乃とばかり話していた。

（こんな時に限ってエンタにもコジローにも会わない……）

智華の心の雲は次第に厚くなっていった。

「そりゃ、キツイわね」

「レイ姐……やっぱりそう思いますう……？」

昼休み。智華は空いている椅子を怜子の席まで運んで座る。

「でもメンバーとコミュニケーションを取ろうとするのは当然じゃない？」

「それはそうですけど……」

机の上に腕を組んでアゴを乗せる。伏し目がちな視線は、机の模様をじつと見つめている。

「……私が抜けた穴埋めにあの子が入ってきたんだから、元々の原因は私か」

「そ、そんなことはな……」

「あるの。ねえ、とも。アンタ、結局なにが一番嫌なの？」

「え……？」

顔をあげると、怜子は右ひじを机に立て、手の甲に顔を乗せて窓の外を見ていた。

「ユキノが気に入らないの？ それともまさのこと？ になが、どうだから嫌なの？」

「それは……」

「それは？」

「それ、は……」

沈黙。長い沈黙が続いた。

（ちよつと、問い詰めすぎたかな……）

怜子はフーツと長い息をはいて、智華の頬に手を当てる。

「とも。もしよかったら、今日の放課後ウチに来ない？」

「え、でもバンドの練習が……」

「いいの。ストレスがある時はムリしないで。まさ達には私から言っておくからさ」

少し悩んだ末、智華は結論を出す。

「……うん」

正直、智華は雪乃に「逃げた」と思われるのではないかと心配だった。しかし、今の状態でバンドに出続けても好転は見込めないと判断し、従うことにした。

「それじゃ、レイ姐のおウチにお邪魔しちゃおうかな」

「そうそう。今夜は二人で飲むとしようか」

「の、飲む？ なにを！？」

「上手い焼酎が手に入ったんだけど。ワインやカクテルの方が好きならそれもあるよ」

「お、お酒はちょっと……未成年なんで」

「冗談よ」

怜子が言うと冗談に聞こえない。

「それと、私も未成年なんだけど」

「っそうでしたあ！」

ようやく智華に笑顔が戻った。

（そういえば……）

思い返してみると、智華が放課後のバンド練習に顔を出さないのは、この日が初めてであった。

第4章・薄雲（後書き）

ちなみに、智華が正法を起こすための大声は近所の方にも周知なので苦情は出ません（笑）

第5章・上（気）弦（前書き）

木崎 怜子（きざき れいこ）通称レイ、レイ姐

15歳・中学3年

小学生の家庭教師のバイトをしている。元ヴォーカル担当で、ハスキーな声に定評があった。

第5章・上（気）弦

「うう……頭イタイ……」

朝、智華はフラフラと家を出た。ん？また朝の場面から始めるのか。まあいい。

「レイ姐、ジューズだつて言つてたけど……あれ絶対アルコール入つてたよ……たぶん」

昨日の放課後、怜子の家に行った智華は、自分がどうやって帰宅したのかさえ覚えていなかった。気がついたら朝、自分のベッドに寝ていた。

「えーと、レイ姐の家で最初に学校の宿題やって、そんで……息抜きにジューズ出してくれて……そこからの記憶がない」

ブツブツと言いながら歩いている。そして、突然ふと思い出したように立ち止まった。

「あたし、まさのアパート行つていいのかな……？」

それは、初めは小さな囁きにすぎなかった。しかし、一旦意識して考えだすと急に不安になってくる。

「あたしが行かなくても、まさにはユキノちゃんが……」

それに、昨日練習に顔を出さなかった後ろめたさもある。

（どうしよう……）

立ち止ったまま考えていると、すぐ後ろでキキキッと金属音がした。ビクツとする智華の横を、自転車に乗った学生がギリギリで通り抜ける。

（歩道の真ん中に突っ立ってたらジャマよね）

仕方なく、智華は歩き始めた。その間にも、智華は頭の中で何度も言葉を繰り返していた。

（どうしよう、どうしよう、どうしよう……）

いつまでたっても、考えは定まらない。

そして気が付いた。

「やば……考えてる間に来ちゃった……」

いつもの習慣で、足は自然に正法のアパートに向かっていたのだ。

「や、やっぱり引き返そうかな」

踵を返そうとした時、智華の目が階段を上ろうとしている人物を捉えた。

「ユキノちゃん……」

気づいた雪乃があげかけた足を下ろし、振り返って会釈する。

「……おはようございます」

「お、おはよう」

それ以上雪乃はなにも言わない。すぐに体の向きを戻してカン、カン、と錆びついた階段を上がって行く。

智華の来訪を歓迎していないことは容易に感じられる。

（ああ……）

一步一步上がって行く雪乃の足音が、心の奥底にまで響く。ほんの小さな足音なのに、智華にはそれが何倍にも増幅して聞こえた。まるで審判の鐘の音のように。

「待って！」

叫ぶや否や、智華は走り出した。階段を上りきったところで雪乃に追いつき、狭い廊下で強引に追い越す。

後ろで雪乃が驚いたような顔をしているが、気にしている暇はない。正法の部屋の前に立ち、大きく息を吸う。

逸る動悸を抑えて息を止める。不安を拭う方法は、これしか思いつかなかった。

「起きろー！ まさー！」

ドアに言葉を叩きつける。ジーンと空気が振動するような気がした。

コツ、コツ……雪乃がマイペースで歩いてくる。そして、ドアをノックしようとした時だった。

「とも、か……？」

ドアが開き、赤い目をした正法が出てくる。

「まさ、あの、昨日……」

「来てくれたんだ」

「え？」

正法は眠そうに目をこすりつつ、きまり悪そうに空いた手で頭を掻く。

「いや、もしかしたら来てくれないかもって思ってたさ。昨日レイに練習来ないって聞いたとき、とうとう見捨てられたかもって……」

「……」

「……おはようございます。正法先輩」

「っおわ！？ ユ、ユキノちゃんいたの！？」

「さっきから……」

空気を読まない子だ。いや、むしろ空気を読んだ上での割り込みだろう。

「時間、急いだ方がいいんじゃないですか？」

「っそうだった！ 待ってて、二人とも！」

正法は急いで奥に引っ込んでいく。

ドアが閉まると、静寂が戻った。

（二人とも、ね。ま、許してやるか）

智華は、勇気を出して雪乃に声をかける。

「ねえ、ユキノちゃん」

「はい？」

「昨日の練習、どうだった？」

「……みなさん、スゴク上手くて。ついて行くのが精一杯でした」

「へえ」

「……」

「……」

会話が続かない。智華はなにか別の話題を見つけようとする。

「あ、ねえ」

「でも……」

一瞬、二人の口が止まる。

「どうぞ。続けて」

「でも、智華先輩がいないと、その……物足りないって言うてました。正法先輩が」

「まさか……？」

「おまたせ」

正法が出てきて、会話は中断された。

「ちょっと時間ヤバイから走るか」

「誰のせいで時間ヤバイんだ？」

「うっせーよ」

そして、三人はアパートを出て走り出した。

「まさ」

「ん？」

道路に出たところで、声をかける。

「嬉しいこと言ってくれるじゃん」

「は？ なにが？」

正法が智華の顔を見る。

「なーんでしょうっ」

智華は前を向いたまま、ペースを上げて二人を引き離す。

「あ、待てコラ！」

「智華先輩、速い……」

乙女心と秋の空、あるいは政治家の言い分、あるいは子どもの興味対象、もしくは若者のブーム……まあとにかく、コロコロと変わるものである。

「レイ姐〜！」

「おっ、とも。その顔は成功したな」

「成功？」

「男ってのはね、一度離れないと気付かないものなのよ。鈍感だから」

相変わらず窓の外を見ながら、怜子は語る。その隣に智華がやつ

てくる。

「レイ姐。……気付かないって、なにに？」

「は？」

「ねー、なにに気付かないの？」

怜子の腕を掴んで揺さぶる。本当にわからない、という目だ。

「わからないの？」

「わかんない」

「……あんたも鈍感ね」

「だから、なにが？」

ともあれ一見落着、に見えたが、智華の上機嫌は長く続かなかった。

第6章・争奪（前書き）

若原 雪乃（わかほら ゆきの）

13歳・中学1年

可愛い外見とは裏腹に低音も出せる。次郎とはイトコ関係。

第6章・争奪

放課後の視聴覚室。現在集まっているのは「メンバー+1、-1」……と、この言い方はややこしいのでやめよう。

今来ているのは正法、雪乃、円、そして智華の四人だ。怜子は今日はないらしい。

「まあた、コジローは遅刻かよ」

「普通、遅刻してくるのはムサシの方なのにな」

智華が笑いながら言つと、正法が聞き返す。

「ムサシ？ 誰だっけ」

「宮本武蔵と佐々木小次郎。巖流島の」

「ああ、そっちな」

それを聞いていた円が口を挿む。

「待ちかねたぞ、武蔵！ ってヤツだろ。じゃあ、アイツが来たら待ちかねたぞ、コジロー！ って言ってやるか」

「いいね、それ！」

「アイツがドア開けたらみんなで一斉に……」

などと言っていると、早速廊下の奥からこちらに向かってくる足音が聞こえてきた。

「お、来るぞ。スタンバイ！」

全員がドアを見つめて到着を待つ。

「来るぞ来るぞ来るぞ……」

しかし、足音は視聴覚室のすぐ隣の資料室に入って行った。

「フッなんだ、違う奴か」

室内に小さな笑い声が響く。……なんでこんな遊びに真剣なんだから。まあ、何事も真剣にやらないと面白くないからな。ちなみに、この足音の人物を私は知っている。当然、みなさんもだ。正解はその後すぐ。

続いて、別の足音がやって来た。バタバタと、急いで走ってくる音だ。

「今度こそ、アイツかな……？」

「そうだろう。遅刻したから走ってきてるんだ」

再び息を潜め、足音がやってくるのを待つ。徐々に足音が大きくなり、曇りガラスに人の影が映る。そして、そのまま影は視聴覚室の前を通り過ぎて行った。

「なあゝんだ、今のもハズレかぁ……」

正法がやれやれ、と手を振る。

「なにが？」

「なにつて、コジローじゃなかっただろ、今の」

「確かに今走っていったのはオレじゃない」

「そう、お前じゃ……ってコジロー！？」

いつの間にか、次郎が視聴覚室に入ってきていた。

「お前、どこから……」

「あそこから」

指さした方向をみると、隣の資料室に続くドアが開いていた。

「さっき隣の部屋に入ったのお前だったのかよ」

「ああ。……ほら、遅刻した時に教室の中がシーンとしてると入りづらিদろ？　それで、ちよつと様子をうかがってたんだ」

照れくさそうに笑う次郎の手に、二枚の紙片があった。円がそれに気付いて声をかける。

「おいコジロー。それ、なんだ？」

この声で、他のメンバーもその存在に気付く。

次郎は手に持ったものを見せびらかすようにして言った。

「いいか？　これはなあ……よく聞けよ」

「聞いてるよ」

円が茶々を入れる。次郎は無視して話を続ける。

「これは……なんと！あの超人気バンド・【クライム】の一等席ライブチケットだ！」

「マ、マジ！？」

「うっそ、スゲー！」

正法と円が同時に叫ぶ。

【クライム】とは、学生バンドグループに所属するものなら誰もが憧れる実力派のバンドグループの名前だ。近々、魅月町でライブが行われることになっているのだが、チケットはとくに完売されていた。

「コジロー、お前どうやって手に入れたんだ！？」

「知り合いの人が、当日行けなくなっただって言っててよ。もらって来たんだ」

「さすがコジロー！」

興奮しているのは、男三人だけではなかった。智華と雪乃も、顔が上気している。

「けど……ちょっと問題があつてさ」

「なんだ？」

円が聞き返す。正法、智華、雪乃も押し黙った。

……フフフ。私にはもうわかったぞ。簡単だ。次郎の手にあるチケットは二枚しかないということだ。

「これ、一枚につき一人だから……その、二人しか行けないんだよね……」

一転して、シーンとした空気が広がった。

「えっと、だから……」

「コジロー」

正法が言葉を被せる。

「このチケットは自分が持って来たんだから、自分は絶対とか言うなよ」

円もそれに続く。

「この前と今日の遅刻のことは忘れんなよ？」

その意図を理解した次郎は、素直に首を縦に振る。

「ああ。初めからそんな野暮なことを言うつもりはない」

「わ、私も行きたいですっ！」

「当然、あたしも」

雪乃と智華も声をあげる。

室内を、緊迫した空気が流れる。まるで西部劇のガンマンが一騎打ちをするシーンのようだ。

「それじゃあ……」

正法が声をかける。やるべきことは、全員が本能で理解していた。

「行くぞ！」

この合図で、一斉に全員の右拳が振り上げられ、打ち出される。

「ジャーンケーン、ポン！」

「あ、ああー！？」

「やっつったあああ！」

主に二種類の叫び声が、狭い室内に響き渡った。

第7章・計略

「それで、結局チケットはエンタとユキノちゃんに決定しちゃって……」

「あら、それは残念」

壮絶で厳正なチケット争奪戦のあった日の夜。智華は自宅のベッドの上に座り、今日の出来事を電話で話している。相手は怜子だ。

「クライムの一等席チケットか。ファンなら万単位で取り引きするわね。」

「あゝあ……行きたかったなあ……クライム」

智華は体を倒し、枕にバフツと頭を沈める。

「ライブは明後日の土曜日だって？」

「うん」

「ふうん……」

電話越しに、怜子がなにかを考えている様子が伝わってくる。

「当然、その日はバンドの練習休みなんですよ？」

「そりゃもちろん」

玲子は一つ一つ確認するようにゆっくりと話す。

「エンタとユキノがライブに行つて、あんたと正法とコジローは予定なし」

「うん。……あつコジローは他の友達から二等席のチケット買取るって言つてた」

「そう。で、正法が予定なしなのは確か？」

「そうだと思う。練習休みになったからヒマだゝって言つてたもん」

智華がそう答えると、再び玲子は黙り込んでなにかを考え始めた。

ここで、視点を玲子の方に移動させてみよう。

「……いい加減、ハッキリさせてもらおうかな……」

智華に聞こえないよう、携帯から口を離してつぶやく。

「……？ なに、レイ姐、聞こえないよ」

「あの子自身のためにも、その方がいいかもね」

電話を無視してもう一度つぶやく。

「レイ姐え」……」

「ハイハイ、わかったわよ。そんな甘えた声ださないの」

ようやく携帯を顔に寄せる。

「とも。あともう一つだけ、質問に答えてもらっていいかな？」

「いいよ」

む、ここで「質問に答えてもらっていいかな？」という言葉自体が質問であり、「いいよ」と答えたことすでに「もう一つの質問」は完結してしまった……という余計な揚げ足は取らないように。

「余計なことは言わないで」

む、むむう！？ 私の声が聞こえているのか！？

「余計な事は言わず、ハッキリとイエスかノーで答えて」

「ハイ、わかりました。で、質問ってなに？」

あ……なんだ智華に言ったのか。やれやれ。

「ズバリ、聞くけど……」

「うん、うん」

「あんだ、正法のこと好き？」

「は！？ なっとななな……あ、あぶっ！」

ドタツと大きな音が電話の向こうから聞こえてくる。……おもしろそうだ。再び智華の方に視点を戻そう。

「いつつ……」

ベッドの横で、智華が顔をしかめながら右の腰をさすっている。

「も、もう！ レイ姐がいきなり変なこと言うからベッドから落ちちゃったじゃない！」

「動揺しすぎ」

楽しむような、呆れるような声が返ってくる。

「う……いてて。レイ姐、こーゆー冗談は」

「冗談じゃないのよ」

強い口調で言葉を被せてきた。

「さあ、とも。イエスかノーか。ハッキリと口に出して言ってもらおうか」

「……」

「どっなの？」

「……」

床に座ったまま、智華は黙りこくって考えをまとめようとしていた。

（まさの事……嫌いじゃないけど、だからって好きだとは……別にそんなこと考えたことなかったし……）

「ま、じっくり考えな」

（考えるったって、まさは朝起きるのが遅くてギター馬鹿でカワイイ女の子にすぐデレデレして……で……）

考えれば考えるほど、智華の頭の中には正法の笑顔が写った。

幼稚園でこっそり教室を抜け出した時、丈の長い学生服を着て中学に入学した時、初めてギターを購入した時、文化祭でライブをやった時。

どの瞬間にも、正法は笑っていた。そして、その隣には必ず智華の姿があった。

（あたし、あたしも 笑ってる）

「笑ってる……」

智華の意思に関係なく、勝手に口が動いた。

「ん？ なんだって、とも」

「笑ってられるよ。あたし。まさと一緒にだよ」

指先で毛布の先をいじりながら、小さな声で言う。しかし……

「好きなの？」

「う……う……」

改めて聞かれると、また口ごもってしまった。

「それはその、えっと」

本音は、もう決まっていた。だが、いざ声を出そうとすると、言葉がのどの内側にピタリと張り付いてはなれない。息が詰まるような苦しさに、智華はとにかく話を終わらせて電話を切りたい一心に駆られた。

「や、やっぱり……好きとか嫌いとか、そーゆーのじゃないかも……うん、好きじゃない」

蚊の鳴くような声でそう締めくくろうとした時、怜子が静かに言った。

「ツバ、のんだでしょ」

「え？」

「あんたは、本当のこの逆を言おうとすると、ツバを飲む癖があるのよね」

「ええ!？」

「これまでの経験上、絶対間違いない」

玲子は断言する。しかし、智華には今さっきツバを飲んだ心当たりはなかった。

「そ、そんなことないよっ！　だつて……」

「だつて？」

「今、ツバのんでなかったもん」

キッパリと智華は言いきつた。その言葉の本当の意味に気付かずに。

「ふーん。それじゃあさ、とも」

ネタをバラすかのように、怜子のかすかな笑いを込める。

「あんた、さっきの言葉はウソなんだね」

「……？」

しばしの沈黙。そして十秒後。

「あ、ああー！？」

やっと気が付いたようだ。

「レ、レイ姐！　今のちよっと卑怯！」

大声で抗議するが、怜子は逆に聞き返してきた。

「好きなのよね？ 本当は」

最後の問い、という口ぶりだ。

「ね？」

「……うん。あたし、まさの事、好き……」

ようやく、智華ののどに風が通った。

第8章・計画

翌日。学校内はある話題でもちきりだった。ちょっと生徒の声を拾ってみよう。

「明日だよなー、クライムのライブ」

「なにそれ？」

「あー、オレそのバンド知ってる。ベースやってるヤツがメチャクチャかつこいいんだよな」

「えー！？ ちょっと見たい、その人」

「残念だけど、もうチケット出回ってないんだよな……オレも行きたかったんだけど」

……というわけだ。人気バンドのライブなど、田舎町では非常に珍しいイベントなので（自分で”田舎町”などと言いたくないが）普段音楽に興味無い生徒でも強い関心を持っている。運よくチケットを手にした者がいると、みんなが羨ましがる。

本来なら、智華も羨む側の立場である。しかし、智華の心はそれどころではなかった。

その理由は、昨日の怜子との電話の続きにある。

「まさの事……好き」

そう言った後も、智華は顔を赤く染めたままベッドの横に座り込んでいた。

（言っちゃった……とうとう言っちゃったよ）

こういうのは言い終わった後で恥ずかしくなってくるものである。

「やっと認めたわね」

「う、うん」

電話の向こうで怜子が笑う。

「それじゃ、勇気を出した智華にお姐さんがプレゼントをやるつか」

「プレゼント……なに？」

「チケット」

「ええっ！？」

思わず智華は大声を出す。

「といっても、クライムのライブチケットじゃなくて美術館のだけだね」

「美術館？」

「明後日から二週間、美術館でコナガワ画伯の個展をやるんだって」

この魅月町には、小さいながらも一応美術館と呼べる建物があった。しかし、この町の出身である風景画家・コナガワの寄付した絵が高い人気を呼び、今では周囲の街並みに不釣り合いなほど規模の大きい建物になっている。

「あたし、絵はあんまり興味ないんだけど……」

「バイト先でもらったのよ。無料鑑賞チケットを二枚」

「あ、それでレイ姐とあたしが行くの？」

なにげなく智華が答えると、電話の奥からため息が聞こえてきた。

「あのねえ……私たちで行ってどうすんのよ」

「へ？　じゃあ誰？」

しばしの間をとり、呆れた声が返ってきた。

「あんたと、正法。二人でデートしなつつつてんの」

「へー……つてええー!？」

いちいち妙なところで鈍感な娘だ。

「折角、休みが取れて二人とも予定なしなんでしょ？　チャンスじゃない」

「でもお……」

正法と二人で遊んだことなら何度もある。しかし、「デート」となると気恥ずかしい。

「あんたから誘いにくいなら、私が上手く誘導するよ。ただし、本番当日は自分でしっかりやりな」

「ちょっ……レイ姐え〜!」

ブツツ。ツー、ツー、ツー……。電話が切れ、智華はしばらく放心状態だった……

「レイ姐! あれ、本気なの?」

朝、今日も正法と雪乃と共に登校し、教室に入ってすぐ怜子に問い詰める。

「本気に決まってるでしょ。はい、コレ。例のチケット」

そう言っつて怜子を取り出したのは、まぎれもなく美術館の無料鑑賞チケットだった。

「でも、でも〜仮に上手く誘えたとしても、あたしもまさも絵画の知識なんてないよ?」

駄々をこねるように怜子の腕にすがる。玲子はいつものように窓の外を見ながら、静かに言った。

「大丈夫。私も以前、偶然あの人の絵を見たことがあるんだけどね……小難しい理屈や知識なんて知らない。スツと心の奥に沁み入るような絵だった。」

「へえ……」

「だから、デートの雰囲気づくりには最適だと思ってさ」

玲子は、智華の方に振り向いて笑いかける。母親が子どもを諭すような優しい笑みだ。

「うう……」

智華はまだ迷っている。

「でも、でも……」

「とも。アンタ……」

一転して、いじわるな小悪魔っぽい笑みにかわる。

「雪乃に正法をとられてもいいの？」

「ゆ、ユキノちゃん！？……って、やっぱりあの子もまさのこと好きなの？」

「そうでなきゃ、いきなり手を握ったり家に押し掛けたりしないでしょ」

当然だ、とばかりに言い切る。

「チャンスは明日のみ。それを逃せば、また練習の日々でなかなかチャンスが来ないよ」

「うう……わかりましたあ……」

そして放課後の練習。今日は全員定刻に集まっている。

「いーなー、エンタ。お前こーゆージャンケンだけ強いんだよな」

正法が口を尖らせる。

「へへ、俺の”強運のパー”が決まったな。……そう言えばコジロ
ー、三等席のチケット買い取り成功したか？」

「おう。大分高くついたけどな。一等席のはただで手に入れられた
のに……」

「ハハハッ！ 遅刻してくるからこうなったんだ！ユキノちゃん、
明日はよろしくな」

「は、はい」

明るく返事をする雪乃だが、その本心はこう思っていることだろ
う。

（どうせなら、正法先輩と行きたかったな……）と。

その思いは声にこそ出ないが、雪乃の表情を観察していた智華と

怜子には簡単に読み取れた。

（あの熱い視線……レイ姐の言うとおり、ユキノちゃんもまさのことが好きみたい。……なんであんなやつのこと好きになるかなあ？）

自分の事は見えていない性分である。

（まさ……）

改めて明日のデートの相手を見ていると、妙に照れくさくなってしまう。目をそらす。練習が終わって帰る途中も、智華は正法を意識してあまりしゃべれなかった。

その日の夜、再び怜子から電話が来る。

「明日、十時に駅前に集合。正法にも言っておいたから、後は自力でがんばりな」

こうして、半ば（ほとんど）強制的に美術館デートが決定された。

第9章・月籠り

デート当日の朝。うーむ、初デートにふさわしい綺麗な晴れ空……と、いいたいのだが、あいにくやや曇り気味だ。

今日は正法の部屋から始めるとしようか。

「うーん……今、何時……？」

ピピピ……と目覚ましが鳴るなか、正法は布団から這いずり出た。

「んと、午前、8時45分……って、ヤベ！ 今日確か10時に駅前だったよな！？」

慌てて布団を跳ねのけ、身支度をする。ちなみに、正法は今日のことは詳しくきいていない。ここで参考のために、昨日の夜電話で怜子が正法に言った内容を紹介しよう。

「明日、10時に駅前に来な。智華がいるから二人で美術館でも見に行つて。……グダグダ言わないの。個展は午後2時からだから、それまで買い物でもしてたら。いい？ わかった？ 10時に駅前、来なかったら……」

ブツツ、ツー、ツー、ツー……と、ここで電話を切られると「来なかったら」の続きが気になって（恐ろしくて）従わざるをえない。

「なんだって美術館なんか行かなきゃならねえんだ？ しかも智華と？」

ブツブツ言いながら朝食の準備をする。今朝の献立は……うむ、男の一人暮らしならこんなものか……という内容だ。

「アイツと街で遊ぶの久しぶりだな。そうだ、携帯の充電しとかな」と

顔も洗わず、寝癖だけ一応直しながらそう言っていると、机の上の携帯が鳴った。

「誰だ？ 朝っぱらから……もしもし」

そして、この電話が事件を起こすのであった。

9時32分。駅前のロータリーにて。

「う、ちょっと早く着いちゃった」

さりげなく、かつ目一杯のお洒落をした智華が現れる。

「まだ30分もあるし……ちょっとベンチで休んでよ」

ベンチに腰掛け空を見上げる。初デートだというのに、空の大半が雲に覆われている。智華は努めて気にしないようにするが、この空模様がなにかを暗示しているような感覚が拭いきれなかった。

（……今、何時？）

腕時計を確認する。9時58分だ。正法の姿は見えない。

「アイツが時間通りに起きてくるのを期待する方がおかしいか。初めっから1時間ぐらいの遅刻は覚悟してるし」

口に出してから、周りに誰に人がいないかを確認する。

つい、強がるような独り言が出る。それは心の奥底に不安があることを示している。

(10時……)

約束の10時になるが、正法は来ない。

「……まだ寝てたりして。ちょっと電話してみよ」

携帯を取り出して正法に電話をかける。しかし、聞こえてきたのは事務的な声だった。

「ただ今、電話に出ることができません。電波が届かないところにいるか、電源が切られており……」

最後まで聞かず、智華は電話を切る。

更に30分、1時間と時が流れるが正法が道の向こうからやってくる気配は全くない。

(11時、25分)

このころになると、さすがに智華もハッキリとした心配を感じていた。何度も電話をかけるが、相変わらず不通のままだった。

（なにやってんの？ …… なにかあったの、まさ……）

一体、正法はなにをしているのだろうか。その答えは朝の電話にあった。

8時50分。

「もしもし…… あ、なんだエンタか」

「おはよう、まさ。ちゃんと起きれたか？」

電話をかけてきたのは円だった。

「どうしたんだよ、こんな時間に」

「それがよく、実はさっきユキノちゃんから連絡があったんだよ。
「コジロー経由で」

「なんて？」

「今日は緊急の用事で来れなくなりました…… ってよ。詳しい理由は教えてくれなかった」

ドタキャンされた、ということらしい。

「そりゃ、残念だったな。二人つきりになれなくて」

「ああ、残念だ。…… オレはな」

「あ？」

「チケットは二枚ともオレが預かってるんだ。で、ユキノちゃんが来れないってことは……」

「あと一枚、余りが……」

ゴクツと大きな音をたてて正法はツバを飲む。

「実際にライブが始まるのは昼からだけどよ。会場自体は朝から入れる。早くから行つとけばメンバーの誰かに会えるかもしれないぞ？」

「おお！ 行く、今すぐ行く！」

朝食もそこそこに、正法は慌ててアパートを飛び出した。

（あ……智華と10時に待ち合わせだったっけ？ま、エンタと合流してから連絡すればいいか。智華とはいつでも会えるけど、クライムは今日限りだからな〜！）

正法はすっかり忘れていた。携帯のバッテリーが今にも切れそうだということに。

そして11時30分。

「1時間半の遅れ……携帯にも出ない……もしかして、事故？」

智華の心を反映するかのように、空の雲も次第に厚くなってきていた。今にも雨が降り出しそうだ。

「事故だったらどうしよう!? まさか、そんなことはないと思うけど……」

顔中に心配の色を浮かべて智華はベンチから立ち上がった。

その時、ベンチのすぐ後ろからタッタタツと誰かが走ってくる足音が聞こえてきた。

「まさっ!?!」

叫んで振り返る智華の目に映ったのは、正法ではなかった。

「智華先輩……」

「ユ、ユキノちゃん? なんでここに?」

白いワンピースに身を包んだ雪乃が、決意を秘めた面持ちで立っていた。

第9章・月籠り（後書き）

サブタイトルの読みは月籠^{つこもり}りです。

第10章・馬鹿野郎

「智華先輩。ちょっと……お話、いいですか」

「う、うん……ねえ、ライブの時間、大丈夫？」

「ライブには行かないことにしました。私、先輩とどうしても話したいことがあるので。それで、先輩のことずっと探しててやっと見つけたんです。」

サラリと言つてのける。

「え！ ライブ行かないの！？ もったいない」

「できるだけ早く、二人きりで会いたかったんです。今日は練習がないからチャンスだと思って……」

「そんな……」

その時、智華の鼻先に冷たい雫が落ちる。とうとう雨が降り始めた。

「とりあえず、あそこで雨宿りしましょう」

二人は近くの喫茶店に移動する。店内は割と混んでいたが、運よく窓際の席を確保できた。

「で、話つて？」

「実は……その……」

普段は元気のいい雪乃が、背中に手を組んでうつむいている。よく見ると顔が赤い。

「ご注文、お決まりでしょうか」

店員がやってきて注文をとる。

「ホットコーヒー。ユキノちゃんは？」

「わ、私もそれで……」

顔を下げたまま細い声で答えた。

「かしこまりました」

店員が去って行った後も、雪乃はそのまま黙りこくっていた。

（まさの事、よね。たぶん）

智華は、雪乃が何を言いたいのかを痛いほどわかっている。自分も怜子との電話で同じような状態になっていたのだから。

（けど、あたしは誘導しない。ユキノちゃんが自分で言い出すまで待つ）

そう決め込んで、智華はただひたすら沈黙に耐え始めた。

時を同じくして、真昼のライブが開始された。その一等席には円と正法の姿があった。

「スツゲー！ やっぱりナマで見ると半端ない実力だね」

「うわっ、マジでレベルが違う」

そんな思い思いの感想も、大音量の音楽と歓声にかき消されて互いの耳まで届かない。そのうち、感想を述べるのも忘れてただただ熱狂し始める。

智華との約束も、すっかり忘れて……

外の雨はますます強くなり、運ばれてきたコーヒーはとくに冷たくなっている。

喫茶店に入ってからすでに4時間が経過。二人はずっと、来店時のままの状態を保ち続けていた。

「……」

智華は三杯目のコーヒーを飲み干し、雪乃は一杯目にも手をつけずにうつむいたままだった。

「……そのっ」

「ん？」

「その……」

そしてまた沈黙。4時間の間ずっとこの調子だ。次第に強くなる雨の音と他の客の話し声意外、何も聞こえない。

時折静寂を破るように、ドアが開閉するカラン、コロン、という鐘が響く。

「つぷはー、だいぶ雨強くなってきたなー」

三人連れの若い男たちが入って来た。

「おーい、こっちこっち」

智華たちの隣のテーブルにいた男が三人を呼ぶ。ここで待ち合わせしていたのだろう。

「どうだった？ クライムのライブ」

「おー、スゴかったぜ」

（ライブ……終わったんだ）

隣の話し声を聞いて、智華は腕時計を確認する。そして、これをきっかけに雪乃に話しかけてみた。

「もうライブ終わっちゃったね」

「……ええ」

そこで、また会話が途切れる。

仕方なく智華が四杯目のコーヒーを頼もうとした時

「わ、私……好き、なんです」

細い声で、確かにそう言った。

「好きです……正法先輩のことが……」

「……そう。やっぱり」

「え？」

智華の反応に驚いて顔を上げる。

「いつから？ まさのこと好きになったのは」

出来るだけ静かに、けれども冷たくならないように智華は聞いた。
雪乃は再び下を向き、ポツリ、ポツリと話し始める。

「……最初に正法先輩のことを知ったのは、次郎さんに見せてもらった写真です。バンド結成時の」

「ああ、あれね」

「その時はそれほどでもなかったんですけど、後に文化祭でバンド演奏を見たときに……その……ああ、本当にこの人は音楽が好きなんだなあって思って、憧れるようになったんです」

「……」

「怜子さんがやめたって聞いた時、バンドに入りたたって次郎さんにお願ひしたんです。それで、実際に間近であつたら……スゴく、胸がドキドキして……これが、恋なんだなって初めて思いました」

「……」

じつと耳を傾けていた智華は、ふとなにかに引かれるように窓の外を見る。

「まさ」

「え？」

雪乃が顔を上げると、智華は大きく眼を開いて窓の外を見ている。その視線の先には、傘を持って駅前をうろつく正法の姿があつた。

「まさ！」

勢いよく叫んで立ち上がり、レジに代金を叩きつけるように支払つて外に出る。雪乃もそれに続いた。

「まさ！」

「あ……智華と、ユキノちゃん？」

気づいた正法が近づいてくる。

「まさ、なんで……」

「ユキノちゃん、なんでライブ断ったの？」

正法が智華の声を遮って雪乃に尋ねる。

「なんか用事でもあったの？」

「いえ、その……」

「ま、そのおかげで俺がライブに行けたけどね」

「え？」

智華と雪乃が同時に聞き返す。

「ユキノちゃんが来ないからってエンタから電話があつてよ。それでさっきまで行ってたんだ」

ニコやかに笑いながら正法はそう言った。

「そのせいで……来なかったの？連絡もしないで？」

「あ、ああ。携帯の電池が切れててさあ……エンタは携帯持つてないし。いや、本当に悪かった！」

正法は頭を下げる。しかし、事の重さを十分に理解できていなかった。

「でもまあ、智華とはまたいつでも会えるし、クライムは一回きり

だし……しょうがないかって思ってたさ」

（しょうがないかって……？ ……なにそれ。ふざけてる）

「智華？」

（その気になれば、公衆電話とか手段はあったでしょ！？ それ以前に、断ってよ）

「おーい、とも……」

（……ヘラヘラするな！）

パシンッ！

音を立て、智華の平手が正法の頬を打った。

「いつて……」

キョトンとする正法に向かい、智華は思い切り怒鳴りつけた。

「ふざけんな！ バカヤロー！」

「先輩！？」

智華は、店先の狭いひさしから出て、雨に濡れながら走り去る。

（もっと、もっと雨を降らせて！ もっと顔を濡らして、あたしの涙をこまかして……！）

念入りに選んだ服も、お気に入りのバッグもびしょ濡れにしながら、智華はあてもなく走り続けた……

第11章・僥倖

「バカ……まさのバカやろう……」

叩きつけるような雨の降る中、智華はフラフラと路地をさまよっていた。どこか目的があるわけではない。ただ、人に会いたくなかった。涙と雨でズブ濡れになった姿を見られたくなかった。

「ハア……」

すっかり消耗し切った智華は、狭い路地裏に突き出た軒下に入る。

「イヤだ……もう」

家に帰ろうとする気力もない。その場にしゃがみ込み、腕に顔を伏せた。

（今日の朝は、こんなことになるなんて思わなかった。何を話そう、とか美術館の他にどこに行こう、とか色々……色々考えてたのに）

誰にも悪気はなかった。次郎はただチケットを提供しただけ。雪乃は本音を打ち明けるためにキャンセルし、円はその空いた席に正法を招待しただけだ。それらが怜子の計画したデートと重なり、すれ違いを生んだ。

”運命”などという言葉は気安く使いたくないが、時にそうしか思えないことが起こる。結果、一人の少女が泣いた

「……ん」

いつの間にか、智華は眠りかけていた。時間を確認すると、防水仕様の腕時計は律儀に針を動かして5時を指していた。雨はまだ強い。

「こんな恰好じゃ、風邪ひいちゃう」

しかし、バッグの中に入れていたハンドタオルも、水がしみ込んで湿っていた。

（何もないよりはマシか）

タオルを広げると、中からなにかが舞い落ちた。美術館のチケットだ。タオルに守られていたおかげで濡れていない。

「ゴメンね、レイ姐……台無しにしちゃって」

体を拭きながらそうつぶやいた時……

「か！　ともか！」

雨音に混じって、人の呼ぶ声がある。

「この声……」

「智華！　どこだあ！」

正法だ。智華を探して、名前を呼びながら近づいて来る。

「まさ……」

見つかりたくない。そう思った時に限って、あっさりと見つかってしまう。

「智華！」

正法が傘をさして走ってくる。うつむいたまましゃがみ込んでいる智華の前に立ち、意を決したように口を開く。

「ゴメン……」

「……」

智華は何も言わない。

「オレ、お前が走り出した後、ユキノちゃんにも叩かれて、それでやっとわかった」

（ユキノちゃんが、まさを叩いた？）

「ユキノちゃんは、オレ達が会う予定だったってこと知らなかったらしい。それで、そのことを知ったとたん、泣き初めて……」私がキャンセルしたせいだ』って」

（……違う。ユキノちゃんのせいじゃない……）

「で、その後いきなりオレに平手打ち喰らわせて、『なにしてるんですか！？ 早く追いかけて！』って叫んだんだ。それで……2度

もぶたれて、オレやつとわかった。智華が、今日のことをとても大事にしてたってことに」

「……」

「オレが、それを踏みにじってしまったことに……」

正法ががつくりと肩を落としてうなだれる。その声が震えているのを、智華は感じた。

「オレ、お前のこと全然気遣えてなくて……軽い気持ちで、笑って本当にバカだ」

（まさ……）

「ゴメン、だけじゃ済まないけど……もう、それしか言えない……ゴメン」

心の底から、正法も悔やんでいた。取り返せない罪に傷ついていた。

「バカまさ……」

ポツリ、智華はこぼした。

「レイ姐からもらったチケットが無事だったことに免じて、もう一回だけチャンスあげる」

「えっ」

「二人とも泣いてたら、誰が慰めるのよ。……行こう？ 今から」

「な、泣いてねーよ、オレは……」

正法はそう言うが、傘をさしているのに目の周りが濡れているのは何故だろうか。

「行こう！」

無理矢理元気をつけるように、大声を出して智華は立ち上がった。正法は顔を見られないように視線をそらす。

「美術館、まだ時間があるから。……バッグがこんなにビシヨビシヨなのに、チケツトは濡れてない。これ、運命ってやつじゃない？」

努めて明るく振舞う。涙は止まっていた。いや、正確に言うところ”止めた”。

「さあ、行こうよ。まさ」

智華は軒下を出て、正法の傘に入る。互いの体温を感じるほど近く寄り添い、傘を握る手が重なる。

「あ、ああ。行こう。……ここからが、その……初、デートだな」

照れくさそうに正法が言うと、智華も笑って答える。

「7時間の遅刻だけどね」

「あ、ハハハ……」

さっきまでは、心にのしかかる重しのように聞こえていた雨音が、
今では違って聞こえる。今の雨は、二人の距離を縮める温もりの雨。

再起を祈り、相々傘は歩きだした。

第12章・色彩

午後からの強い雨のため、美術館には智華と正法以外の客はいなかった。二人にとっては好都合だ。

「コナガワって人、この町の出身なんだって？」

「そ、確か……今23歳だと思う」

「はあー、スゲエ。23で個展開けるって」

正法が感心してため息をつく。

「こんな小さい町にも天才っているんだな」

小さい、は余計だ。

二人は通路を進み、個展会場に入る。

「あー、これ知ってる。美術の教科書に載ってた」

「マジ？ …… 本当だ」

コナガワの絵は、大半が風景画である。しかし、ありのままをコピーするような写実ではなく、その風景を見たコナガワ自身の感情が込められているような、生きた絵だった。

「こっちの絵の山とあっちの山、どこがどう違うんだ？」

「んー……こっちの方が少し雲の位置が低いかな。どんよりしてる感じ」

他に人がいないため、つい声が大きくなってしまふ。……それでいい。今の二人に必要なのは会話なのだから。

「あ！まさ、あっちだよ。『神の唄う街』」

智華が奥に続く通路の看板を指さす。『神の唄う街』とは、コナガワが修行の旅に出る前、小説家・阿倉浪才の墓の前で描いたと言われている作品のタイトルだ。数ある作品の中でも特に人気が高く、今回の目玉にもなっている。

「レイ姐に、この絵だけは見て来いって言われてるんだ」

「それじゃ行くか」

二人は並んで通路を進む。その先のスペースには、ただ一枚の絵が飾られているだけだった。他にはなにもない。部屋を独占するように、その絵は壁にかかっていた。

「わぁ……」

「すげえ……」

絵を見た二人は揃って息をのんだ。

その絵に描かれていたのは、一言で言うなら「愛」だった。文章では表わしにくい、「人を愛する想い」が絵となってそこに存在していた。

「知ってる？まさ。この絵って、コナガワさんが恋人に向けて描いたんだって」

「へえ……なんか、そんな感じだな」

「いいね……こんな風に、ハッキリと愛が伝えられるなんて」

「……」

視線は絵の方を向いたまま、智華は正法に近付く。

「こんな風に、正直に好きってことを表現できたらいいのにね……」

「そうだな」

「……」

「……ゴメンな、約束破って」

正法が言った。

「本当に、ゴメン」

「えっ……も、もういいよ！ そのことは。反省してるってわかったから」

「でも……」

「そ、それに、わかってくれたんでしょ？ あたしの気持ち……」

再び、智華の顔が赤らんでくる。

「ああ、うん。わかった、智華の気持ち」

「う……繰り返さなくていいよ、そこは。……恥ずかしい」

もじもじと顔を伏せる。

「智華の気持ちはわかった。だから……」

「だから？」

「その、オレも、言う。オレの気持ち」

相変わらず、正法は絵を見たまま、智華は下を向いたままだ。

「まさの気持ち……」

正法は胸を張り、目をつむって宣誓するように口を開いた。

「オ、オレは！ その、智華のこと……オ、オオオレも……」

「フフ、落ち着いて」

「オレも、智華の……オレも」

「オレ、もお……？」

智華は少しいじわるそうに聞き返す。

「オレは、その、うん。アレだ！」

「アレってなに……うあ!？」

正法が智華の頭を掴んで、無理やり正面を向かせる。当然、智華の視界には『神の唄う街』が入る。

「これが、オレの智華への気持ちだ」

「え……」

額からあふれ出るほどの、温かい感情……。

「……って！ ヒトの作品を勝手に使うな！ 自分の口でちゃんと言え！」

「い、言えるか！ 恥ずかしい……」

ホール中に響き渡るほどの声で二人は笑った。外の受付係が苦笑するほどに。

「この根性なし」

「や、やかましい」

「これがオレの気持ちだ……って、カッコつけといて。アハハハ」

「うーるーせーえー」

美術館を出ると、雨は上がっていた。相々傘の必要はなくなったが、二人は手をつないで歩いていく。

「明日から、また練習だな」

「そーだね。……あ」

思い出したように智華がつぶやく。

「どうした？」

「あゝその……（ユキノちゃんがまさのことを好きだったこと、コイツ気付いてんのかな？ ……気付いてるわけないか）」

「どうしたんだよ？」

「んゝ……いいや、ヤツパなし！」

「なんだよゝ、気になるなあ」

（今だけは、この話ナシにしよう。今は二人きりの時間……）

朝からずっと曇っていた空には虹が出ていた。水たまりに映るのは、七色の色彩と二人の笑顔。そう、雨は上がった

第12章・色彩（後書き）

次回、いよいよエピソードです。

エピソード・謳え、高らかに

作中何度目か分らない、朝の光景。正法のアパートの前で、智華は雪乃に会う。

「ユキノちゃん。おはよう」

「おはようございます……先輩」

なぜか雪乃は顔を背ける。

「どうしたの？ 元気ない？」

心配そうに智華が尋ねる。

「……あの、こ、この前は本当にゴメンナサイ！ 私ので正法先輩と会えなくて……」

今にも泣き出しそうな声で謝る。

「い、いいってば。もう、それは。結局、あのバカが忘れるのがいけないんだし」

「でも……」

「いいの。……あの後、ちゃんと仲直りできたから」

雪乃の肩に手をおいて慰める。

「……先輩たちって、本当に仲がいいんですね」

「そ、そう？」

「とても」

「ア、ハハハ……そう」

照れをごまかすように笑うが、顔が赤いためごまかしきれない。
い。

「だから私。あきらめました」

「え？」

顔をあげて、晴れやかな表情で雪乃は語りだす。

「私は、今も正法先輩のこと好きですけど……それは、やっぱり『憧れ』なんだなあって気付いたんです。もし私が正法先輩に遅刻されても、あんな風に怒れないって……」

「え、でも、まさのこと叩いたって……」

「それは、智華先輩のことを悲しませたから、です。……本当は、先輩に初めて会った時から予感がしてたんです」

「予感？」

「正法先輩に本当にふさわしいのは、この人なんじゃないかって私には出来ないことが出来て、それは正法先輩に必要なことで……」。

でも、認めたくなかったんです。それを認めたくなくて、何度も智華先輩につつかかるようなことをして……本当に、ゴメンナサイ！」
再び頭を下げる。

「認めたくなかった」これはまさしく、智華も初対面の雪乃に対して抱いていたものと同じではないか。智華と雪乃。二人は立場こそ違えど、内に秘めた思いは同じだったのだ。

「……いいよ、ユキノちゃん。あたしもそうだったから」

「えっ」

「ユキノちゃんのおかげで、あたしも本当の気持ちに気付けたんだから」

「智華先輩……」

「ありがとう。ユキノちゃん」

智華は笑った。雪乃も、つられて微笑んだ。

「さ、それじゃあネボスケまさを起こしに行こうか！」

「ハイッ！先輩！」

二人は並んで錆びついた階段を上って行く。そして、これを離れた所から見つめている三人組がいた。

「……っはあゝ、両手に花じゃねえかよゝまさの奴」

「マジで付き合うことになったんだ、あいつら」

「……一時はどうなるかと思ったけどねえ」

円、次郎、怜子だ。

「あいつらが仲悪くなりかけた原因は私たちにもあるからね」

「知らなかったとはいえ、シャレになんねえからな。俺たちのせいでこじれたら」

次郎が申し訳なさそうにつぶやく。

「後で怜子から話聞いて、なんとか誤解を解こうと思って来てみれば……」

「ちゃんと解決出来てたみたいね。……よかったよ。コレで」

怜子の口元にも笑顔が浮かぶ。

ただ一人、浮かない顔をしているのは円だ。

「それにしても羨ましいなあゝまさ。我らがアイドル・ユキノちゃんにまで……」

「エンタ、お前本気で雪乃に惚れてたのかよ」

「けど、今の話からだと言キノはまさのこと諦めたみたいよ」

「つてことは！」

円の目が輝く。

「チャンスなんじゃねーの？」

何気なく次郎が言うと、円は思わず大声を出した。

「よっしゃあ！ 頑張るぞ！」

「ちょっつるさい、エンタ！」

慌てて次郎が円の口を手でふさぐ。幸い、智華たちには聞こえなかったようだ。

「まあ、チャンスとは言っても……」

「ん？ なんだ、レイ」

「いや、別に」

チャンスだとは言っても、雪乃が円のことを好きになるかと言つと……非常に難しいと思われる。

「んじゃ、俺たちもそろそろ朝練行くか」

次郎が促すが、怜子は動かない。

「もうちょい。……アレが聞こえるまで待つて」

「アレ？」

次郎と円が同時に聞き返す。直後に、その答えが聞こえてきた。

「まさー！起つきろー！」

カードの表と裏は、いつも同時に存在する。しかし、表と裏はいつも背中合わせで、向き合うことがない。無理に合わせようとすれば、ねじ曲がるばかりだ。

同じ思いを抱きながら、違う方向を向いていた二人の少女によるねじれ。……今、二人が向き合っているのは、カードの壁を取っ払った一人の男のおかげなのかもしれない

さて、これで四つ目の話は終わりだ。いかがだったかな？

今回の話も、この町に住んでいる多くの人々のドラマの一部を切り取ったものだ。この町にはまだまだ、多くの人々とドラマが存在している。……聞きたいかな？聞かせてあげよう、また会えたら。

……私の名前は魅月町。また、会う日まで。ごきげんよう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4065d/>

魅月町・表裏の月

2010年10月10日07時47分発行